

## 来賓挨拶

### 国土交通省河川局砂防部長 牧野裕至

皆さん今日は。国土交通省砂防部長牧野裕至です。本日は石井富山県知事さんをはじめ、世界からスチュアート・スミス様、そしてネパールからはマテマ元大使様、そしてインドネシアからはジョコ・レゴノ様、ガジャマダ大学教授の皆様方はじめ、多くの皆様方にこのようにお集りいただきまして、世界からの来賓が集う「国際砂防シンポ」が、この富山の地で盛大に開催されますこと、まず持つてお慶び致します。



日本の砂防の歴史は古く律令時代にまで遡ります。「山川の掟」を定め、森林の伐採を制限致しました。日本の国家が形成された時代にこのような法律が制定されたことは、その前から地域社会で同様なことが行われていたことを伺わせます。

江戸時代になりますと築城の技術を生かし、砂防堰堤が造られるようになりました。広島県福山市の堰堤群は現在も大切に保存され、現在でも当時のまま機能しています。この時代人口増に伴い新田開発が必要となりました。山地からの土砂流出は天井川をつくり、その決壊は大災害となることから上流からの土砂流出の抑制が必要となったのです。ご当地富山県の常願寺川の砂防を小型化した工事が実施されるようになったのです。



明治になり、淀川や利根川の舟運維持のための砂防が実施されるようになりました。新たな産業育成は急務でしたが、そのエネルギーを山の薪炭に頼らなくてはならず、荒廃した山々からの土砂流出の抑制が日本の経済発展の鍵でした。



明治の後半には国家の基本たる「砂防法」が制定されました。近代国家として河川・森林と並び、国土の骨格としての法体系が整備されたのです。こうした中、富山県民の悲願であった立山砂防の工事が始まったのです。立山で開発された砂防の技術は、その後日本各地に広がって行きました。現在も立山の砂防は国の直轄工事としてその代表的なものです。



その後、二つの世界戦争を経て、平和国家として再出発した日本は土砂災害に苦しむ国々への技術協力に努めました。立山発の日本の砂防の技術はフィリピン、インドネシア、ネパール等東アジアのみならず、ペルー、ホンジュラス等技術協力により世界へ広がっていきました。また最近ではインタープリメント等を通じ、ヨーロッパ諸国に日本の技術が紹介され協同研究（イタリア、ルーマニア）も実施されています。



このような日本の砂防の歴史を振り返ると、常願寺川の上流立山砂防の成した役割と今後の使命が浮かんで来ます。砂防は限られた土地や資源の中で人間が安全で豊かな生活を営むための自然への働きかけです。砂防は自然征服でも無ければ、単純な自然崇拜でもありません。砂防は厳しくも豊かな自然の中で2千年を超える日本の歴史の中で見いだしてきた豊かな文化です。



20世紀は広大な未開地を求め覇権が争われました。しかし人類が月に降り立ち40年を迎え明確になったことは、人類はこの限りある地球で自然と調和しつつ暮らしていかなければならないことです。

気候変動等による大災害の発生が世界各地で予想されるなか、立山砂防をはじめとする日本の砂防の文化が役に立つと考えています。

立山から世界に。この国際フォーラムが有意義なものとなること期待しています。

